サンゴ類に関する国際古生物学シンポジウム報告

浜 田 隆 士*

Report on the International Paleontological Symposium on Corals (and other Coelenterata)

By

Takashi HAMADA

This symposium was held in August, 1971 at Novosibirsk as the first international symposium by coral specialist with more than a hundred attendance from thirteen countries. It was well organized by the Academy of Sciences of USSR directed by the Academician Dr. B. S. SOKOLOV, and very successful in discussing about many different subjects on various groups of fossil coelenterates. About eighty papers, which were contributed from eleven countries, were read in six days.

Two specialists from Japan, Drs. M. MINATO and T. HAMADA, took part in the symposium, and honoured the chairmanship of the sessions on the tetracorals and tabulate corals, respectively. The present reporter was strongly impressed that it was quite necessary to organize a certain kind of working group in our country as soon as possible to follow the international tendency in cooperating with the world specialists in this field of science.

I ま え が き

近年、古生物学の諸分野にあつても、それぞれ専門化した研究者間に、国際的規模で結びつく機会を作ろうという試みがさかんである。ごく最近では、フランスのポーにおける介形類の古生態に関するコロキウム(1970)、ローマでの第2回浮遊性微化石国際会議(1970)、ノボシビルスクにおける国際花粉学会(1971)などがある。またこのような集会でなくとも、専門家間でグループを組織し、サーキュラーやレターを発行している例も少なくない。たとえば、シカゴにおける北米古生物学コンベンション(1969)を機会に発足した。米地調(ワシントン)のデュトロ(J. T. DUTRO)を主幹とする腕足類研究グループの「チョウチンガイ通信」(The Lampshell Letter)や、オスローの

古生物学博物館にいるブルトン(D. L. BRUTON)が世話役となつて各国から情報を集め、1971年に94頁にわたる大部のプリント「三葉虫新報」(Trilobite News)を発行した三葉虫関係者の連絡組織などである。

ところが、サンゴ類の研究者についてみると、従来、ソ連を除いたほとんどの国で、こうした連絡機関は何ら組織化されていないのが実情のようである。たとえあつたとしても、一部の少数者のみの、しかも臨時的なグループでしかなく、恒常的な活動を行なっているのをきかない。わが国においても事態は同様である。目下のところサンゴ類研究者だけの組織や連絡機関はなく、まとまつた催しとしては、1970年11月6日～7日に東京大学海洋研究所で「サンゴ礁に関するシンポジウム」が、それを他の動植物の分野の人々と協同して開

* 東京大学教養学部宇宙地球科学教室

かれた程度にすぎない。

一方、ソ連内にあつては、科学アカデミーの中に「動植物の歴史的発達の過程と法則」問題に関する科学会議 (Scientific Council on Problem "The Ways and Laws of Historical Development of Animal and Plant Organisms") という機関が設置されており、その活動の一環として、1963年には既に化石サンゴ類に関する研究者の連絡組織である Commission on Study of Fossil Corals of the USSR が、ノボシビルスクにおいて発足しており、これまでに数回にわたつてシンポジウムを開いて、成功をおさめている。それらの結果は、たとえば1967年5月4日～8日にエストニアのタリンで開かれた第2回シンポジウムについてみると、次に掲げるような4巻にわたる特別出版物となつて公表されている。

Papers of II All-Union Symposium on Fossil Corals of the USSR

Vol. 1 Paleozoic Tabulata and Heliolitoidea of the USSR (1971)

Vol. 2 Paleozoic Rugosa and Stromatoporoidea of the USSR (1971)

Vol. 3 Distribution and Sequence of Paleozoic Corals of the USSR (1970)

Vol. 4 Mesozoic Corals of the USSR (1970)

こういつた情況のもとで、著名な床板サンゴ類研究者である科学アカデミー会員のソコロフ (B. S. SOKOLOV) 博士の強い推進力もあつて、今回表記のような、サンゴ類研究者集団としては最初の国際的シンポジウムが、ソ連のノボシビルスク市において開催される運びとなつたのである。提唱者やその周囲の人々が、主として化石材料を扱かつている関係で、より生物学的なアプローチをとる研究者に対しては、やや徹底を欠いたうらみはあるとしても、とにかく、第1回の国際シンポジウムを開くまでにこぎつけたソ連古生物学界の実力と功績は、少なからず評価されなければならぬまい。

報告者は、幸いにしてこの意義あるシンポジウムに、数少ないオリエンタル・スペシャリストとして参加する機に恵まれ、諸国の研究者と意見を交し、さまざまな情報や印象を得ることができたので、ここにその一端を記して諸賢の御参考に供したい。シンポジウムへの出席にあつては、アカデミシアン・ソコロフ教授をはじめ、とくにノボシビルスクの科学都市 (Akademgodorok) にある科学アカデミーシベリア分院の地質学地球物理学研究所 (Institute of Geology and Geophysics, Siberian Branch of Academy of Science of the USSR) の関係者一同から、一方ならぬお世話をいただいた。紙面をかりてここに深甚なる謝意を表するものである。

II 組織と運営

シンポジウムの組織委員会は次のような構成となつている。

委員長 : ソコロフ (B. S. SOKOLOV)

副委員長 : イワノフスキー
(A. B. IWANOVSKI)

" : クラマレンコ
(N. N. KRAMARENKO)

セクレタリー : デュバトローフ
(V. N. DUBATOLOV)

" : テサコフ (Y. I. TESAKOV)

この他実行委員として、ソ連内各地の研究機関から代表格の研究者14名が加わり、合計19名で委員会が組織された。事務局は、会議の開催地であるノボシビルスクの (Novosibirsk) 科学アカデミー分院内におかれ、役員やアカデミーの職員が諸般の事務にあたつた。しかし会期中、たとえば腕足類研究者のような、同じ古生物学関係とはいえ、異つた専門の人達はもちろんのこと、実験鉱物学関係の一部の学者なども、会の運営や通訳など、いわば裏方役を担つてくれていたことは注目される。

こうした国際学会での不可避にかつ第一の難関となるコミュニケーションについては、レニングラードの二つの研究機関から、地質学一般にかなりよく通じた“セミプロ”的通訳を招いており、この二人の女性が、講演原稿の翻訳から質

疑・討論にいたるまでの主役をつとめた。公式用語は露語および英語と指定されていたので、若干の仏語による講演に限り、通訳は露語のみとなつた。講演は一題20分と決められており、前もつて送付されてきている講演通りに露訳または英訳され、演者の進行に合わせて、ボックスからワイヤレスで聴講者のイヤホンに伝えられた。若手の通訳もしばしば起用され、またときにはインツーリストの女性までも動員されてその任に当たったが、学会そのものがきわめて特殊な分野を対象としているだけに、講演や討議はつねに難しいラテン名やテクニカルターム、地名、地層名などの連続であり、そのための通訳の苦労は並大抵のものではなかつたことがうかがわれた。

会期は8日間ではあつたが、そのうち8月24日には、中休みとしてノボシビルスク近郊のオブ湖(Ob Lake: 幅17 km, 長さ200 km の大人工湖)へのリクリエーション・ボートトリップ、そして20日の午後半日に、ノボシビルスクの市内エクスカーションが組み入れられていた。シンポジウムは科学都市の中心に近い科学者館(Scientists' House)で行なわれ、初日の午前中は登録に、また最終日(25日)の午前は閉会式、夜はバンケットに、それぞれあてられている。

毎日10:00~13:30をモーニング・セッション、15:30~18:30をイブニング・セッションとし、それぞれ間に20分の休憩時間が入れている。講演数の多い日は、グランド・ホールとスモール・ホールとに分けて、プログラムの消化を計つた。各セッションのテーマおよび座長は次に示す通りである。

シンポジウムのスケジュール

18日(水)

- 15:00~ 開会セッション
- 15:30~16:30 サンゴ類の形態に関する一般問題 [E. MONTANARO-Gallitelli, B. S. SOKOLOV]
- 16:50~18:30 地質時代における礁の形成 [同上]

19日(木)

- 10:00~13:00 層孔虫類 [J. KAZMIERCZAK, H. A. NESTOR]

- 15:30~18:30 四射サンゴ類 [P. K. SUTHERLAND, W. G. KHROMYCH]
- 15:30~18:30 中生代および新生代の腔腸動物 [V. N. ZLATARSKI, E. I. KUSMICHEVA]

20日(金)

- 10:00~13:30 床板サンゴ類およびヘリオライテス類 [Y. I. TESAKOV, M. CHURKIN]

21日(土)

- 10:00~13:30 四射サンゴ類 [R. BIRENHEIDE, A. B. IWANOVSKI]
- 15:30~16:30 アラスカの古生代サンゴ類 [D. L. KALJO, M. MINATO]
- 16:50~18:30 古生代サンゴ類の生物地理 [同上]

22日(日)

- 10:00~13:30 中生代および新生代の腔腸動物 [N. S. BENDUKIDZE, J. P. CHEVALIER]
- 15:30~18:30 四射サンゴ類 [W. A. OLIVER Jr., N. Y. SPASSKY]
- 15:30~18:30 床板サンゴ類およびヘリオライテス類 [V. N. DUBATOLLOV, T. HAMADA]

24日(火)

- 10:00~13:30 古生代腔腸動物の生物地理 [E. R. KLAAMANN, H. TERMIER]
- 15:30~18:00 ハイドロゾア類 [O. V. BOGOYAVLENSKAYA, A. GRUBICH]
- 15:30~18:30 古生代サンゴ類の生物地理および研究方法 [D. L. KALJO, C. L. ROWETT]

25日(水)

- 10:00~ 閉会セッション

質問事項は、ソ連の研究者1名と国外からの参加代表1名からなるそのセッションの座長宛に、紙面に書いて提出し、これを適当にアレンジして、各セッションの講演終了後に一括して討論にかける

方式がとられた。ちなみに、登録時に手渡されるフォリオのビニールケースには、プログラム、講演要旨集、参加章、名札、ノボシビルスク科学都市の紹介パンフレット、絵はがきと切手付きの封筒1枚などとともに、メモ用紙を兼ねて、このための質問提出用紙が挿入されていた。討論の際は、通訳はボックスを出て壇上にのぼり、逐語通訳を行なった。そしてこの際の討論に限り、仏語についても通訳をつけ、露・英両訳が配慮されていた。

最初の企画では、シンポジウムの会期の前後に、タリン (Tallin)、レニングラード (Leningrad)、モスクワ (Moscow)、ノボシビルスク (Novosibirsk)、タシケント (Tashkent) など (位置については第2図参照)、ソ連内の主要な研究所や博物館に保存されている標本を検査することができるよう、グループ・ツアーが予定されていた。しかしながら、現実問題として参加希望者の日程が大きく喰違つて、調整できぬままにキャンセルされ、結局は個別に希望の機関を訪問する形になってしま

МЕЖДУНАРОДНЫЙ ПАЛЕОНТОЛОГИЧЕСКИЙ СИМПОЗИУМ ПО КОРАЛЛАМ

ПРОГРАММА

НОВОСИБИРСК, АКАДЕМГОРОДОК
1971

第1図 シンポジウムのプログラム冊子
(露文側表紙。英文は反対側から見るようになっている。中央の図は今回のシンポジウムのシンボルとされたテトラディウム *Tetradium*)

第2図 シンポジウム開催地と関連都市

った。

シンポジウムへの参加者は、最大動員時でおよそ120~130名であつたとみられる。ソ連国外からの参加人員数について、会期最終日までには公式の集計結果は得られなかったが、フランス(7)、アメリカ(5)、ドイツ(2)、ポーランド(3)、オーストラリア(2)、日本(2)、チェコスロバキア(1)、カナダ(1)、イギリス(1)、スウェーデン(1)、キューバ(1)、ユーゴスラビア(1)の計11カ国、25~6名であつたと思う。

なお、参加者の宿泊には、科学都市内にあるアカデミー直属の Golden Valley Hotel があてられ、ソ連内各地から参集した人々も、やはり同じホテルに宿泊していた。そのため、夜間の非公式討論会や任意のグループの集会にはきわめて便利であり、ほとんど毎晩のように、何らかのサークルによる討論や交流会がさかんであつた。

III 研究発表と出版物

講演の申込みにもとづいて作成された講演要旨集(15×20 cm 版, 218 頁)には、ソ連内から60篇、ソ連外の9カ国から29篇のアブストラクトが、原語のまま掲載されている。その内訳は、アメリカ(8)、フランス(5)、ドイツ(4)、オーストラリア(3)、ポーランド(3)、日本(2)、イギリス(1)、オーストリア(1)、スウェーデン(1)、カナダ(1)となつている。実際には、この要旨集にのらなかった講演も若干あるし、また時間の関係もあつて、逆に発表とりけしとなつたものもあるので、シンポジウムで公表された論文数は上記の数と多少喰いちがう結果となつた。しかしながら、おおよその情勢を見るのには、この要旨集を頼りにして何ら支障はない。

いまこのなかに収録されている89篇のアブストラクトから、その対象とした内容によつて論文を分析してみると、第1表のような結果が得られ

第1表 シンポジウムのアブストラクトに見られる研究分野の分布

論文数	18	8 10	30	17 13	17	16 1	9	5 4	15	14 1	合計	ソ 外
主 題												
フ ォ ー ナ	5	2 3	3	1 2	0	0 0	0	0 0	1	0 1	9	3 6
分 類 一 般 構 造 進 化・系 統	4	1 3	12	7 5	10	9 1	3	2 1	8	8 0	37	27 10
生 態・発 達	3	1 2	5	3 2	4	4 0	1	1 0	0	0 0	13	9 4
層 古 地 理	4	3 1	3	1 2	0	0 0	0	0 0	1	1 0	8	5 3
新 生 代	0	0 0					1	0 1			1	0 1
中 生 代	0	0 0			1	1 0	4	2 2	2	2 0	7	5 2
古 生 代	2	1 1	7	5 2	2	2 0			3	3 0	14	11 3
主 題 分 類	CORALS (GENERAL)		RUGOSA		TABULATA HELIOLITID.		HEXACORAL		STROMATO.		89	60 29

(数字は斜線の左上がソ連人研究者数、右上がそれ以外の研究者数を示す)

る。この表によれば、ソ連内で研究の重点的対象となつている分野が一目瞭然である。すなわち、床板サンゴ類やヘリオライテス類については、ソコロフの影響力大なるものがあり、まるでソ連人研究者の独壇場となつている感が強い。また層孔虫頭に関しても、ソ連はこのシンポジウムでみる限り圧倒的で、やはり他国の追従を許さぬ形勢にあるといつてよい。

なお、講演内容ではサンゴ骨格の微細～超微細構造についての発表が少なくなかつたが、この集計ではこれらを分類一般や進化・系統と同一の枠に入れてとり扱つた。このことは、骨格構造とこれらの諸テーマとは實際上密接不離の関係にあるという認識にもとづいているからに他ならない。

講演要旨集の冊子の後半部分には、前述のようなグループ・ツアーが予定されていたことも関連して、これまでにソ連から刊行されたサンゴ類に関するモノグラフ的な研究の基礎となつた標本類の所在地が、リストアップされている。これは、実際問題として今回は有効に使われなかつたけれども、それぞれの専門家にとっては、将来きわめて有益なガイドとなることは疑いない。次にその機関名と件数だけを列挙しておく。研究活動の趨勢をみる一つの援けにもなるであろう。

機関名 (所在地)	件数
CNIGR* Mus. (Leningrad)	131
Paleont. Inst. Acad. Nauk (Moscow)	43
Mus. Inst. Geol. Geophys. (Novosibirsk)	25
Geol. Mus. Acad. Nauk Esthonia (Tallin)	24
Mus. Kafedr Hist. Geol. Leningrad Gosyd. Univ. (Leningrad)	19
Mus. VNIGRI** (Leningrad)	14
Gorny Mus., Leningrad Gorny Inst. (Leningrad)	11
Mus. Minist. Geol. Uzbekistan (Tashkent)	4
Mus. Inst. Geol. Geochr. Pre-C, Acad. Nauk (Leningrad)	1
(合計)	272件

このシンポジウムで実際に読まれ、あるいはフル・マニユスクリプトが届けられてきた論文については、1971年9月末日を締切りとし、約80論文を「古代刺胞類」(Ancient Cnidarians)と題し上・下2巻に分けて出版されることになっている。しかしながら、その発行期日や頒布については、今のところ明らかでない。

ちなみに、シンポジウムの開催期間中会場の入口に、科学アカデミー発行の出版物の販売コーナーが特設されていた。ここには、サンゴ類関係の諸論文のみならず、地質・古生物一般の近刊書が数多く出品されており、ソ連国外の研究者だけではなく、ソ連内各地から参加した人々も、これを機会に競つて購入していた。なお、会場近くのアカデミー直属のブック・ストアには、さらに多数の関係専門書が陳列しており、その探索だけでも優に1時間は費やすことができるほどの在庫種数をほこつていた。国外者については、これらの購入図書ならびに寄贈をうけた文献類を、後日組織委員会の責任において、それぞれの研究者宛に送付してくれることになっていた。これは、つねに重量制限に苦しめられながら行動している国外からの参加者に対しては、誠に思いやりのある計らいであつたといえよう。

IV 議事および将来への見通し

今回のシンポジウムが、この分野で最初の国際的な会合であることからして、組織委員長であるアカデミシアン・ソコロフによる開会ならびに閉会講演は、これまでの研究の大勢を総括するとともに、今後のこの種の学界活動についてもある方向づけを提案するものとして、きわめて大きな意義をもつものであつた。

サンゴ類のシンポジウムといつても、その原文のタイトルの下には括弧つきで (and some other Coelenterata) とあることでも示されるように、層孔虫類などをも含む大きなグループを対象とする意図があり、とくにこれらの起源を問題とするとき、単に形態分類に終始したり、微細構造に注

* CNIGR: Центральный Научно-Исследовательский Геолого-Разведочный Музей

** VNIGRI: Всесоюзного Нефтяного Научно-Исследовательского Геолого-Разведочного Института

目したりするだけでなく、カンブリア紀や先カンブリア代の、いわゆる祖先型性格をもついくつかの無殻後生動物についてもまた同様に深い知識が必要である点が強調された。また、生化学的アプローチとして当然のことながら、サンゴ類としばしば密接に関係する単細胞藻類による光合成との相互作用や代謝についても、もつと鋭く追求されるべきであろうと述べられた。実際、参会者全般の意見としても、とくにソ連圏内の研究者の熱望するところであろうが、形態学一つを例にとつてみても、今後はたとえ古生代のサンゴ化石専門家といえども、現生のものを扱わずして研究を深めることはできない、と考える傾向がひじょうに強かったことは事実である。

開会にあたって、ソコロフ教授は、研究者間の国際交流が、上述の目的達成のために先ず解決されねばならぬ問題であるとの観点から、是非ともこの第一回シンポジウムを生かして、近い将来に第二回目を開こうではないかと提案した。これに応えて、閉会式ではフランスのシュバリエ (J. P. CHEVALIER) から、1976年にパリで「サンゴ類に関する第二回国際古生物学シンポジウム」を開きたい旨、申し出がなされた。また、その運営にあたっては、相当前から準備を進める必要があることから、キューバのズラタルスキー (V. N. ZLATARSKI) が、シュバリエを委員長、ソコロフを副委員長とし、他にオーストラリアのヒル (D. HILL)、日本の湊正雄、アメリカのオリバー (W. A. OLIVER, Jr.) らを委員とする国際運営委員会を、できるだけ早期に発足させてはどうかとの動議を提出した。しかし、これに対してソコロフ委員長は、欠席しているヒル女史の同意を必要とすることでもあり、今すぐというわけには行かぬと答え、その方向で時間をかけて準備を進めることになった。

また、この委員会の性格としては、単なるシンポジウムの主催者たるべきではなく、たとえば用語の統一の問題とか、できることならば、コンピューターを駆使しての新属の登録、ならびに定期機関誌発行といった。いわば永続的な中央組織としての仕事も課してはどうか、という意見もあつた。しかし、これに対してもソコロフは、自分が

過去8年間ソ連内での化石サンゴ類に関する委員会に関係してきた経験から推しても、そのような大きな、しかもかなりの労力を要する活動的な組織を維持するには、なお幾多の問題点や困難があり、慎重に検討すべきであろうと説明した。

結局、今回の国際シンポジウムは、シュバリエの招待通りに、1976年にパリにおいて開催されることになるであろうが、これを機会に、さらに次の二つのサンゴ類関係学会が近く開かれる予定であることが、オーストラリアならびにソ連の代表からそれぞれ披露された。

1) サンゴおよびサンゴ礁に関する国際シンポジウム

1973年6月

Brisbane および Great Barrier Reef

2) 第5回ソ連内化石サンゴ類シンポジウム 1975年

Georgia 地方 (Caucasus)

前者に関しては、その主たる対象とするところが現生のサンゴ類とその礁にあり、しかも近時、グレートバリアー・リーフの研究が、地質時代の礁の機構を解明するうえでひじょうに役立つことが判ってきている折から、生物学上の成果に加えて、生態学や堆積学の方面でも大きな意義をもつであろうことは想像に難くない。

V 付随する各種行事

サンゴ類という比較的限定されたテーマをもつシンポジウムでありながら、前記のように8日間という長い会期が必要であつたのは、一つには講演申込み数が80題をこえ、しかも参加者のほとんどが、かなり共通した興味をいだいていることが判っている以上、分科会のような形で同時にいくつもの小集会を開くことは、事実上不可能であつたからだと思われる。また、講演時間を一題20分と制限してはみたものの、それでもなおかつ時間が不足することは予測されていたであろうから、これ以上きりつめて会期を減らすことなど、到底出来ぬ相談であるといわざるを得ない。それにしても、もしこの8日間をフルに働いたとすれば、

運営委員会はもちろんのこと、聴講する側にしても、皆疲れ果ててしまうであろうことは火を見るより明らかであった。

そこで、委員会としては、前述のようにそのうちの丸一日をリクリエーションにあて、また半日を市内見学にとつて、いわば息抜き場を用意した。このほか21日には、夕刻からソコロフ委員長邸に主だったソ連内研究者と外国人の計48名が招かれて、なごやかな家庭的な晩さん会が、そして最終日の夜には、お別れパーティとして120～130名全員出席の、盛大なバンケットがそれぞれ催された。このような会は、いずれもシンポジウムそのものの本来の目的からはかけ離れた催し物であることは論をまたない。しかしながら研究者間の交友を深め、国際親善の実を果すには欠かすことのできない性質のものであろう。それと同時に、参会者に対して、精神的にも肉体的にも、ひじょうに大きな影響力があつたことも見逃せない。それだけに、主催者側の心遣いは並大抵でなかつたことと推察される。レクリエーション当日は、ソコロフをはじめ受付嬢にいたるまで、多勢の人が家族ぐるみで参加し、国外からのお客様に対して真摯なホスピタリティを示してくれたのは、まことに感謝すべきことであつた。

しかしながら、このような休息の場にあつても、通訳の責任を負っている人にはその余裕さえなく、オプ湖を滑るボートの甲板では皆が歌を唱つたり歓談したりしている最中にも、キャビンに引きこもつて原稿との照合に、あるいは講演者との打合せ、内容のチェック等々と、はたで見る目にも気の毒な活躍ぶりであつたことが、強く印象に残っている。いずれにしても、雑多な言葉の集団の中でのコミュニケーションの不徹底は、国際学会にはある程度さけられぬ事柄であるとはいえ、通訳担当者の労は誠に多としなければならない。閉会式に臨んで、ソコロフ委員長自からもこれら通訳の労をねぎらつて、名指して礼をのべ、一同と共に拍手で感謝の意を表したのは、当然のことではあろうが見習うべき態度であつた。

会期中、アカデミー分院の地質学・地球物理学研究所に所属する古生物学博物館が公開されており、各スペシャリストはそれぞれソ連の友人を頼

りに案内を乞ひ、希望すれば、双眼顕微鏡による薄片標本の検鏡もできるように手配されていた。蛇足ながら、ソ連研究者の用いるサンゴ類の薄片は、多くの場合薄手のカバーガラスを使用せず、スライドガラスを更に重ねて厚く保護し、それをラベル入りの紙袋に入れ、それをまたボール箱に格納したうえで引出しに整理してある。こういつた方法にはもちろん一長一短もあるが、参考にすべき点も少なくないように思えた。

前にものべたように、まとまつたかたちでの研究所や博物館めぐりは、御破算になつてしまつたのであるが、会期の前後にかなりの人々がモスクワやレニングラードを経由しており、それらの主要な研究機関を訪れる機会をもつたようであつた。日本からの参加者のうち湊は、会期前にモスクワの研究所で幾日かを過ごすことができたし、浜田は会期後にタシケント地質省の博物館で、天山—パミール地域のオルドビス紀ないしデボン紀のサンゴ類薄片を検査することができた。ごく一般のツーリストとしては、こういつた行動に対して便宜を与えられることはほとんどないであろうから、非公式になつたとはいえ、やはりこのシンポジウムの力の及ぶところ大なるものがあつたとみてよい。

V あとがき

現在の日本の古生物学界の大勢をながめるとき、現生・地質時代を問わず、サンゴ類に関する研究者がいちじるしく少ない点是否定できない。しかしながら、古生物学でもつとも基本的な、研究材料の有無やその質や量についてみると、必ずしも非観的なものばかりではない。このことは、かつての故矢部教授を中心としたシルル紀、中生代、現生のものの研究が、そして湊の二畳・石炭紀のモノグラフがあつて、いずれも高い評価をうけている事実からも理解される筈である。しかしながら、長足の進歩をとげつつある現今の古生物学的水準からすれば、爾来経過した年月のハンディキャップはおおむねなく、それらの多くについて再検討の必要にせまられていることもまた事実である。できることならば、多くの若手研究者がこの分野でも続々と輩出し、新鮮な目で

さらに徹底した研究を行なつてほしいものであることは、いまさらいうまでもない。

それにしても、現在の研究勢力そのものについてみても、これをより機能的に活用しなければならぬことも疑いなく、たとえば文献の入手一つをとつてみても、情報過多気味の最近の国際情勢に対処して行くには、一人一人の研究者自身の努力もさることながら、是非とも何らかの形で協力し合うことが一層必要であることは間違いない。このサンゴ類に関する第一回国際シンポジウムが開かれたのを機会に、わが国においてもこうした方向に一步を踏み出しておくことが、将来、国際的な舞台に直面したとき、名国の研究者に伍して活躍することのできる。一つの条件ともなるのではないかと思われる。

おわりに、ソ連内研究者の日本の古生物学界に対する関心には、並ならぬものがあることを付記

しておきたい。文献や標本類の活発な交換はもうろんのこと、今のところ遠い望みではあろうが、いつの日か訪日の機会を持ち、自から日本の材料を比較検討したい。といった気持を誰もが抱いているのを感じてきた。実際、古地理問題一つを論じるにしても、ソ連の立場からみれば、実のところ日本列島や中国大陸のデータ抜きにしては、ほとんど不可能ともいわねばならないことなのであり、彼らの希望は、日本人への単なる外交辞令とにいきれるものではなからう。逆にわが国の古生物学界にとつても、ソ連圏内の知識は無視することのできぬものであることはうたがうべくもない。将来、この分野での両国の科学協力態勢が一層強められ、アジア部分の主要な地史発達の解明にとつて大きな貢献がなされることを望んでやまない。